

ぼくのたいせつなは

平尾小・1 やまもと りょうた

「見て、はがぐらぐらになってきたよ。」

なつ休みになつて、ぼくの上のまえばをさわると、ぐらぐらぬけそうになりました。

「どれ、さわらせて。」

「いたい。」

さわるだけかとおもつて口をあけたら、おかあさんは、ぐらぐらになつたはをつよくひっぱつてきました。

「いたい。ひっぱらんで。」

ぼくは、大きなこえでおこりました。ぼくのたいせつなはになにをするんだ、そうおもいました。ぼくが、ごはんをたべているときに、いっばいやくに立つてくれたたいせつなはなのに。ぼくが大すきなラーメンをたべるときにも、チョコのついたパンをたべるときにもかつやくしてくれたはなんだぞ。からあげみたいなかたいおにくをたべるときには、すぐががんばつてくれたことをおもい出したら、おかあさんにひっぱられたはが、かわいそうにおもえてきました。

「はにも、いのちがあるんだよ。」

ぼくがそういうと、おかあさんは、

「そうなの。でも、はやくぬかないと、うしろからおとなのはが生えてきちゃつて、おとなのはがななめになつちやうよ。」

といました。それをきいてびっくりしました。はがななめに生え

ている人なんて見たことがありません。おかあさんがうそをついているとおもつて、おばあちゃんにきいてみました。でも、おばあちゃんも

「そうだよ。はならびがわるくなるねえ。」

といいました。おとなのはがななめに生えて、はならびがわるくなつたらいやだ。だつて、にこつとわらつたときに、はがおかしとおもわれるかもしれない。いやだ。でも、ひっぱられるのもいやだ。

「じぶんで早くぬけるようにがんばるから、ひっぱらんで。」

おかあさんにそうおねがいして、それから、まい日、ぐらぐらのはをしたべらでさわつたり、下のはでおしたりして、もつとぐらぐらになるようにがんばりました。

そして、ついにぼくのはがぬけたのです。ぬけたはは、すぐになくなつちやいそうなくらい小さかったです。このはがなかったら、ぼくはラーメンもパンもからあげもたべられなくて、こんなに大きくなれなかったかもしれない。このはは、やっぱりぼくのたいせつなものだったんだとおもいました。

「いままでありがとう。さようなら。」

ぼくは、小さなこえでおれいをいって、ぬけたはをいえのき下になげました。はがぬけたところには、もう、おとなのはがすこし生えてきていました。これからは、このはがぼくのたいせつなはです。ぼくのたいせつなは、これからおじいちゃんになるまでよろしくおねがいします。